

## 自然観察の手びきの編集・企画にあたって

伊 藤 十 治 \*

昭和61年6月下旬、福井県県民生活部自然保護課の田中正樹主事より電話があった。その内容は相談したいことがあるので、そちら（明新小）へ行ってよいかということだった。実は、3ヶ年計画で、県内9ヶ所を選び、自然観察の手びきをつくりたいという。そして、本年より1年間に3冊づつ各々35頁の副読本で、写真・絵などを中心に文章をできるだけ少なくしてほしい。野外教育活動や自然観察会などの副読本やガイドブックとしての活用にしたく、しかも、中学生を対象につくってほしい（資料1参照）とのことであった。

余りにも、突然のことなので、今年中に原稿を3冊つくれと言われても大変むずかしい。しかも夏休みを中心に調査研究をしなくてはならず、執筆者も決定していないのにとてもできそうにない。田中主事とは以前から環境庁委託の調査研究報告書を数回提出している関係で、同主事も考慮したあげく、筆者に相談および依頼したかったのが本音であったという。他人の協力ができないから、筆者1人にでも頼みたかったという。それは、かつて“福井県の自然”副読本3冊を企画編集したから、それの抜すいしたものでよいから、なんとかならないものかという強引さといおうか、同主事の熱意からでたものであろう。筆者も数あるなかから指名された有難さが、理解できないこともないので、予算はついてしまっている以上、田中主事に協力しようということであってもらつた。今、ふりかえってみると大変なことを引き受けたが、協力者が心よくやってく

### （資料1）自然観察パンフレット作成要領

#### 1. 目的

近年の自然志向の高まりの中で盛んになってきた野外教育活動や自然観察会等の副読本及びガイドブックとして活用できるパンフレットを作成する。

#### 2. パンフレット作成地区

6.1年度 久須夜ヶ岳周辺（小浜鴨等）、経ヶ岳周辺（赤兎山、法恩寺山、六呂師等）、越前海岸

6.2年度 敦賀半島周辺（敦賀半島、常神半島）、刈込池周辺、冠山周辺（夜叉ヶ池、越美山地等）

6.3年度 青葉山周辺（青葉山、大島半島等）、若狭の山々、九頭竜川周辺（九頭竜ダム、荒島岳、石徹白川等）

なお、各地区とも当該年度に調査執筆し次年度に印刷する。

#### 3. 体裁

180mm×170mm 36ページ（表紙を含む。）全ページカラー印刷

#### 4. 内容

説明文は口語文（です。ます。調）で、中学生が理解できる程度とし対象地域の四季を通じたものとする。説明に当たっては写真・図等をできるだけ活用する事とし、風景・動植物は撮影困難な哺乳動物を除いて、カラー写真を使用することとする。スペース的には50%以上を写真・図等で占めることとする。

#### 4. 項目

説明項目は原則として次の通りとする。

気候・気象・地形・地質・植物・動物、自然観察のルート案内等、その他地形・地質・植物・動物の項目については、対象地域の特性により細分化できる。

例 動物を野鳥、哺乳類、昆虫等に細分する。

#### 5. その他

1ページは20字×28行2段組

\* 910 福井市高木64-12 福井市中藤小学校

れたからできたもので有難い一語につきる。

但し、筆者一人ではつくれない。少なくとも、ごく少数人間で、しかも本年度中に3冊印刷完了することを念頭において人選する。何とかなりそうな予想が田中主事と相談の途中で見通しがたったから引き受けしたものだ。地学関係では、総合的に伊藤政昭校長が最適當者であることがわかつていた。植物関係では、同僚の斎藤寛昭教頭にお願いすることにした。初めは、2人ともむずかしいがなんとか協力しよう。筆者の企画編集に従うことになりょう解された。ともかく、場所選定についてはいろいろと問題点があった。特に、県指定の内外海半島と奥越の刈込池とでは両極端を数ヶ月の中で調査撮影することに時間的に余裕があるか否かということである。しかし、問題点があ

署付	校長	教頭	教務	標
6年9月2日 第628号	(伊藤)	(斎藤)	第194号	教頭
附和6年8月28日				

福井市立明新小学校校長様  
福井県県民生活部長  
自然観察パンフレット作成事業への協力依頼について

本県では、今年度から自然保護思想の普及啓蒙事業の一環として、野外教育活動や自然観察会等の副読本及びガイドブックとして活用できるような標記パンフレットを作成することになりました。しかし、この事業を円滑に進めるためには、理科教育についての豊富な経験と知識を持った方の協力がどうしても必要あります。

つきましては、御多忙中恐縮ですが、パンフレット作成のための現地調査及び原稿執筆等について貴校の下記の方の御協力を願うことを承認していただくようお願いいたします。

なお、御承認のうえは公務に支障ないように関係者と調査日程等について協議するとともに、調査費用につきましても別途当方負担として本人に支払われますので御了承願います。

記  
伊藤十治 福井市立明新小学校教頭

署付	校長	教頭	教務	標
6年7月30日 第630号	(伊藤)	(斎藤)	(斎藤)	教頭
教 学 取第393号 昭和6年9月 之日				

福井市立明新小学校校長 様  
福井市 教育委員会  
学校教育課長  
自然観察パンフレット作成事業への  
協力依頼について

みだしのことについて、福井県県民生活部長  
より貴校 伊藤十治 教頭の作成委員就類があり  
ましたので、その写を送付します。よろしくお  
取りはからいの程お願いします。

事務連絡
昭和6年8月29日

伊藤十治 様  
福井県県民生活部自然保護課長  
自然観察パンフレット作成について

標記事業につきまして御協力いただき厚くお礼申し上げます。

さて、標記のことにつきましては、昭和6年8月28日付け自第947号により教育長及び所長の承認をしたところですが、現地調査に当たっては、その都度所長の承認が必要と存じ、別紙のとおり調査承認依頼書を作成しましたので、御利用下さい。

自 第 947 号 昭和6年8月28日
------------------------

明新小学校教頭  
伊藤十治 様  
福井県県民生活部自然保護課長  
自然観察パンフレット作成事業の協力依頼について

本県では、今年度から自然保護思想の普及啓蒙事業の一環として、野外教育活動や自然観察会等の副読本及びガイドブックとして活用できるような標記パンフレットを作成することになりました。しかし、この事業を円滑に進めるためには、理科教育についての豊富な経験と知識を持った方の協力が是非とも必要あります。

つきましては、御多忙中恐縮ですが、パンフレット作成のための調査及び原稿執筆について格段の御協力を願うようお願いいたします。

っても、やはり財政査定を受けた後だから、県指定の場所でそこの写真を撮影してほしいということでお仕事にとりかかってもらった（資料2～資料5参照）。

調査撮影にあっては、できるだけ公務に支障がない日で、3人（朝倉教諭を除く執筆者）がいっしょに行ける日を選んだ。職専免という形で、しかも保険保障の手続きも県の方でとっていただいたことが仕事に専念できて有難かった。また、フィルム代も金額の点で充分とは言えないが、まあまあであったと執筆者たちは感想をいっている。執筆者・その内容・作成地区、印刷などを一覧表にしたのが下の表である。

発行年月	作成地区 (印刷KK名)	執筆者	勤務先	執筆内容
1年目 昭.63年3月 (足羽印刷)	内外海半島 (吉田錦文堂)	伊藤政昭	坂井郡新郷小学校長	地形・地質・岩石関係
	刈込池 (吉田印刷)	齊藤寛昭	福井県立盲学校教頭	植物関係
	三国・芦原海岸 (足羽印刷)	朝倉精道	敦賀市粟野中学校教諭	イラスト
		伊藤十治	福井市明新小学校教頭	動物関係・企画編集
2年目 平成元年3月 (若越印刷)	夜叉ヶ池 (足羽印刷)	伊藤政昭	坂井郡丸岡中学校長	地形・地質・岩石関係
	敦賀半島 (若越印刷)	齊藤寛昭	福井県立盲学校教頭	植物関係
	赤兎経ヶ岳 (吉田錦文堂)	奥野宏	南条郡今庄中学校教頭	昆虫・一般動物関係
		伊藤十治	福井市明新小学校教頭	動物関係・企画編集
3年目 平成2年3月 予定	青葉山 (未定)	伊藤政昭	坂井郡丸岡中学校長	地形・地質・岩石関係
	河川 (未定)	齊藤寛昭	福井県立盲学校教頭	植物関係
	島々 (未定)	奥野宏	南条郡今庄中学校教頭	昆虫・一般動物関係
		伊藤十治 (協力者)	福井市中藤小学校長	動物関係・企画編集
		見附史教	大飯郡高浜中学校教諭	植物・イラスト
		小林輝己	福井県立丸岡高校教諭	海中写真

この他に福井市鷹巣小学校 岸上金之三教頭、福井県立羽水高校 田中和男教諭、坂井郡雄島小学校 高木幸夫教頭、福井県立博物館 坂本育男学芸員、道守高校 渡辺定路教諭等に編集上、ご指導をいただき心からお礼を申し上げる。

## 苦労話と編集方針

副読本は、あくまで読者が読んだ場所へ行ってみたいという衝動にかられ、足が1人でに動き、自然に語りかけ自然の中での疑問を産む中で、疑問を動きほぐす手助けになればと思ってつくったものである。

前記（自然観察パンフレット作成要領）したものより、大きさ・作成地区などは変更した。表紙は作成地区の代表写真でありたいが、奇抜な写真をできるだけ大きな写真にしたかった。例えば、

内外海半島であれば、蘇洞門での写真が常識のようだが、印刷した表紙は、特別に船に乗って我々3人が行き、伊藤校長の愛用カメラで撮影したものである。先輩（伊藤校長）に、筆者は勝手にこれをこういうふうに撮影してほしいと注文したり、こっちの方向からこの部分を鮮明になるようにピントを合せてほしいとか、遠慮なく言わせてもらった。しかし、先輩や同僚・執筆仲間は、何1つ文句を言わずに筆者の強引な注文に従順に実践して下さった。あるときは、こんなふうにはどうかという高度なご指導をいただいた。これらのお陰で副読本が完成したものである。きれいで立派な写真は、すべて伊藤校長を始め各々の専門分野の執筆者の腕であり、悪い部分があれば、筆者の選球眼の不足で筆者の責任である。

自然を撮影するときは、すでに、企画編集の面でこの自然（写真）を何頁に入れて、その次にあの自然（写真）を入れる。そして、こんな文章とイラストを入れる。次頁には、一息いれるつもりで大きな写真（自然）を入れる。こここの自然（写真）を入れるとどうだろうか。いや、あそこの自然（写真）よりこれの自然（写真）がよいだろうと筆者の頭の中はフル回転している。その回転から出されるエネルギーが、注文したり遠慮なく言わせてもらったわけである。一方では、自然に出くわす樹木・草花・むし達・動物・岩石・地質などから珍しいものは手あたり次第筆者は撮影する。これは、それぞれの担当者から提出される資料の穴うめに使用するためである。

撮影しても、現象後、自然界で撮影したときのイメージとはちがったものになっていることがしばしばあった。一貫した編集方針では1回の撮影でなく何回も同じ場所へ、時刻をずらして、期日を変えてまるで狂人みたいに何回も気にいるまで撮影する。しかし、その中でたった1枚の写真しかまに合わないこともたびたびであった。忍耐強く努力のつみ重ねで、何とかして立派なよい副読本をつくろうという情熱の何ものでもない。

ともかくも、1年目の3冊は、かたや嶺南の端（内外海半島）へ調査撮影にいくかと思えば、今度は奥越の山奥（刈込池）へと、三芦海岸は、近いから何時でも簡単に行けるだろうと思っているとそれがかえって行くことができない。もし、嶺南や奥越は行ったとしても天気が悪くなつて撮影がだめになつたりする。無駄な往復になつたりすることが何回かあった。しかし、嶺南へ行くとき途中で天気が悪くなつても目的地まで行き、どうしても駄目ならば、敦賀半島が晴天であれば予定変更して次年度の計画を実践する。無駄にしない方法をとったこともあった。天気予報を考慮して目的地まで行っても、天気が変化して撮影不能、天气回復まで時間待ちしたこととなつかしい思い出の1つになっている。こんなときに、その土地の人達の話（自然環境・民俗学的なものなど自然とどのような結びつきで日常生活を過ごしているかに焦点をあてる）を聞いたこともしばしばあった。目的地へ行っても、午前中の方が太陽光の関係で被写体（自然）がよいのに、到着したときでは逆光になって撮影がだめになることもあった。伊藤校長の話によると1人で夜中に登山（夜叉ヶ池）して日の出を利用して撮影したこともある（伊藤校長が下山すると筆者が登山するとの約束しないのに途中でばったり会つたことからわかる）。誠に頭の下がる思いである。この間ほんとうに外傷や事故がなかったことが何よりもよかった。これは、県担当者・教委および職場の仲間達のご高配の賜であったと思う。筆者などは職場の仲間から「教頭さん、今日は天気がよいのに撮影に行かないのですか」と励ましの言葉を何回となく聞かされたことがなつかしい。心から感謝

申し上げたい。このような心くばりの中での仕事は、苦しくともやりがいのある仕事となり、よくもまあ!! 1年間に3冊の副読本ができあがったものだと我ながら満足感にひたることができた。

表紙の題字は、始め、活字で書く計画であったが表紙が死んでしまうのであたたかみのある文字がほしかった。そこで筆者の独断で、ぜひ知事の直筆で書いてもらう県に依頼した。ただし、秘書課の誰かが書いて知事の直筆だと言っても駄目だよと念をおしたことも思い出の1つ(今でもその原紙は保管してある)。ところが、自然の然が点々なのに一本の線になっているので、これでは学校の漢字テストでは一本の線にした自然の然でも、まるにしなくてはならない。困ったねという教員がいたのには苦笑せざるを得なかった。なるほど、県知事が書いたのだから子供達が書いてもよいことになるのか・・・

次に、あとがきとか、この本を読む方々にとか、ともかく編集方針などを書いたのだが、どうも文章が県職員に同意が得られなかつたのだろう? 印刷されたあとがきは県自然保護課の文章で下に記した“はじめに”に書いたのが筆者の念頭にある編集方針である。

### ――はじめに――

文化のふるさと土台は自然であり、その恩恵によって人間性ゆたかな心身のやすらぎが与えられ今日の繁栄があったと思う。この意味で、この副読本から次のことを学びとっていたいだきたいたい。

副読本をよりどころにして、より深く自然の美しさ・神秘さ・恐しさそして大切さを学びながら、自然環境と人間生活との調和を保つことによって夢をもって生きるよろこびを味わっていただきたい。

そして、次代の人々のためにぜひとも県民あげて正しい意味の自然保護の実践化をしたいと思う。特に、この副読本をつくるときに次の点に意をつくした。

- ① できるだけ自然環境をすなおに合理的に、しかも人間生活との結びつきの中でとらえたい。例えば1個の石から何万年前の自然環境を想像し、現在の生活をエンジョイする。1枚の写真でも、みかた1つでいろいろなことを想像する。
- ② 知っているつもりでも自然の生きかたには未知なるものが無尽蔵にあることを知ろう。そして、その未知の探究に挑戦しよう。例えば、新緑の頃、新葉は緑色と思っていたらまるで紅葉じゃないかと錯覚する。カエルの産卵は水中でするものと信じていたら、木の葉や土中に産卵する。
- ③ 自然の威力は、人間生活にとってよいにつけ、わるいにつけ、人間の力などは問題にならないことを肝に銘じておこう。しかし一方では、その威力に対して人間の智力を総結集していどみ続けよう。例えば、人間の無智なために自然破かいすればそれを復旧できない。少なくとも、もとに近い状態にもどすためには数十年の才月と大きな資本・努力が要求されよう。

※知識があつても知恵のないことを意味する。

副読本の内容には、民俗的なものをふんだんに組み入れた。俳句・歌・民謡などおよそ自然科学書の中では一般にみられない内容を入れた。筆者個人の考えでは、筆者の知る限り、今までの自然

観察の手引き書は面白くさくもない。そして余りにも自然科学くさくてこちこちの文章で一般人から敬遠されてしまうのではなかろうか？そこで、筆者は一般人にも自然というものはとても身近かで自然と調和して生きていく（縄文時代の考え方）やり方がこれからの自然観にぜひ必要であることを知ってほしい。そして今までボサードと見ていた自然でも、副読本を読むことによって、あくこういうふうに自然をみると、なるほど!! そうなるのかといった具合に、血湧き肉おどる衝動にかられさせるにはどうしたらよいか。また、今までとちがった自然観を得させるにはどうしたらよいか。ここが筆者の最も苦慮した点である。しかし、一方では自然愛好者にも学問したなアと知識欲を満足させるにはどうしたらよいか。要は、読者に満足感を与えていたいと苦心したつもりである。例えば、1口メモ・ミニ知識・QアンドA、ミニ漢字、豆知識などふんだんにとり入れ、あるとき読書自ら記録して副読本を読者自身の手で完成させてほしいために空白にした。

ただ、副読本を写真集にはしたくなかった。筋の通った1冊の副読本に、そして3冊を通して読むことにいや全部9冊を読み終ることによって福井県の自然全体を把握できればという考えでつくれたつもりである。

印刷発行までには、関係者（執筆者と県職員）の合同会議で編集のことで討論していく中で、以上のような筆者の考えも知らぬまにずれてしまったこともあった。しかし、筆者は一歩もゆずらず強引にやった内容がある。それは、執筆者同士間では筆者と同じ意見であったが、県職員とは印刷の段階ではどうかなアともめた。2年目に印刷した夜叉ヶ池編の31頁（生存競争）の項である。県職員では考え方はわかるが、この項目を除去してほしい。筆者は基本的な編集方針にひっかかるので我が意見を押し通した。この項は、特に白黒の写真ではあるが、これは学問的には貴重な写真で、奥野教頭が、日頃フィールド調査観察中に撮影されたもので誰にでもできるものでは決してない。奥野教頭は笑いながら偶然に撮影できたものだと言われているが・・・筆者は決して偶然ではないと思う。奥野教頭が、むしろ平常からひたむきな自然に対する心がまえが天に通じ、天が与えてくれたチャンスであったしそのチャンスを奥野教頭が立派に生かす力があったからである。さすが奥野教頭である。頭がさがる。だからこそ筆者も強引に意見をおし通したわけである。生命の尊さという点では、この項はとても大切であることを理解してほしかった。人間と動物界とは全くちがう点はここにある。弱肉強食は、動物界の節理であるが、動物達もお互いに生きるためにむだな殺し合いは決してやらない。この事実をすべて人間達はしっかりと身につけていなくてはならない。まして、子供達には、はっきりとこの節理を教え、みせるべきものはみせ、かくす必要は全くない。解剖も近頃は、学校教育で実施していないが、今度の指導要領改訂でまた復活している。生きる中で、死という現象（自然界では強烈な場合）を子供達の眼にもしっかりと焼きつけさせておく必要がある。この場合、個人プレイの中で経験ではなくて多数の中でしかも組織された過程の中で経験させ、総合的に判断できる訓練が必要と思う。教育の本質は、一生涯の中で、強烈な場面を有効に応用し、生きる指針になるようなものでなくてはいけないと信ずる。強烈な場面は自然界の中にいっぱいある。したがって、子供達の時代にはもっともっと自然界の中で学びとられるよう大人達は努力しなければいけないのでなかろうか。人工的な素材よりも自然界という広大な際限のないものを大いに利用・活用したいものだ。